

22

『コペンハーゲンの医学・哲学紀要』における
収録論考の主題と傾向

安西なつめ

日本大学

『コペンハーゲンの医学・哲学紀要 Acta medica et philosophica Hafniensia』は、トマス・バルトリン(Thomas Bartholin, 1616–1680)によって1673年から1680年にかけて全5巻刊行された。各巻は、序文、目次、第1部、第2部で構成されている。資料の本幹をなす第1部には、全5巻合わせて、延べ84人の執筆者による論考が595題収録されている。第1巻は1673年に刊行され、1671–1672年に寄せられた149題の論考が収録されている。第1巻の執筆者数は11名である。第2巻は1675年に刊行され、1673年に寄せられた134題の論考が収録されている。第2巻の執筆者数は22名である。第3巻と第4巻は合わせて1677年に刊行された。1674–1676年に寄せられた178題の論考のうち、第3巻に95題、第4巻に83題の論考が収録されている。執筆者数は合わせて31名である。第5巻は1680年に刊行され、1677–1679年に寄せられた134題の論考が収録されている。第5巻の執筆者数は20名である。

収録数が最も多いのはコペンハーゲン大学教授のオーレ・ボルク(Ole Borch, 1626–1690)の190題であり、次にトマス・バルトリンの142題、次にシレジア生まれでコペンハーゲンで活躍した医師カスパー・コリーケン(Caspar Kölichen, 1635–1687)の35題と、キール大学教授のヨハン・ルートヴィヒ・ハンネマン(Johann Ludwig Hannemann, 1640–1724)の34題が続く。特筆すべきものとして、コペンハーゲン出身の解剖学者ニコラウス・ステノ(Nicolaus Steno, 1638–1686)の論考が10題収録されている。

収録論考の内容は多岐にわたる。全論考の主題は大きく分けて、医学一般(病気、治療、人の解剖の報告ほか)、奇形の報告、動物の解剖、植物の報告、実験の報告、地学・気象・鉱物などの自然科学関連の報告、その他、に区分することができる。医学一般に関する論考としては、腫瘍や水腫、結石、昏睡、熱、負傷による怪我などの報告およびそれらの治療について、薬の効果、亡くなった人の解剖、尿や汗に見る病気や死の兆候、出産に関するものなどがある。奇形の報告には、羊の重複奇形や人の多指症などがある。動物の解剖には、トナカイやウサギなどの哺乳類、ワシやコウノトリ、クジャクなどの鳥類、トカゲなどの爬虫類、カエルなどの両生類、ダツなどの魚類の解剖がある。植物の報告には、アフリカやノルウェーなどで観察された珍しい植物の報告や、病気に対する植物の効能について述べられたものがある。実験の報告には、硫黄や各種の鉱物、火や水に関する実験があり、地学・気象・鉱物などの自然科学関連の報告には、コペンハーゲンで観察された彗星やその他の気象について、ノルウェーの川、アイスランドの水についての報告などがある。その他の論考としては、虫の報告や、デンマークの古器物について記されたものなどが収録されている。

『コペンハーゲンの医学・哲学紀要』には、同一の執筆者による複数の論考が収録された。大部分は医学関係の論考であるが、主題は多様で自然科学全般に及ぶ。また、報告内容および投稿者の範囲はコペンハーゲンあるいはデンマークに限定されたものではなく、わずかながらオランダやドイツなどの周辺諸国の情報や、当時デンマークの統治下にあったノルウェーとアイスランドに関する報告が含まれている。

付記：本研究は2018年度科学研究費補助金「初期近代における北ヨーロッパの医学の発展に関する研究」(課題番号17K12958, 研究代表者安西なつめ)による成果の一部である。